

大宮神社

大宮神社では、阿蘇山と、紀元後 1 世紀から 2 世紀に生存していたと言われている伝説の景行天皇の守護神が祀られている。言い伝えによると、九州巡礼の際、景行天皇の一行が菊池川沿いを進んでいるときに行く手を阻まれた景行天皇を助けようと山鹿の人々が松明を掲げたと言われている。やがて、この松明を紙製の提灯で表すようになり、今では町のいたるところで提灯が見られようになっている。

「上がり燈籠」など、室町時代（1336–1573）を始まりとする、毎年 8 月に開催される山鹿灯籠まつりの重要な神事の多くは、大宮神社本殿で行われる。

燈籠殿の展示

山鹿「灯籠」は大宮神社燈籠殿で通年展示されている。山鹿「灯籠」には、山鹿灯籠まつりの際に女性の踊り手が頭にのせる金提灯や銀提灯、ならびに神社、城郭、鳥籠、人形の縮尺模型の提灯などもある。これらは、「和紙」（伝統的な手漉き紙）とわずかな糊のみで作られている。

毎年山鹿灯籠まつりのために新しい「灯籠」が作られ、「上がり燈籠」で、大宮神社の神々に奉納される。燈籠殿では、翌年の山鹿灯籠まつりまで 1 年間「灯籠」が展示される。また、この施設（燈籠殿）では、名高い宮廷画家である土佐光起（1617–1691）により描かれた三十六歌仙の肖像画が展示されている。貴族であり歌人でもあった藤原公任（966–1041）により有名な歌人が選ばれた。土佐の作品の状態を守るため、肖像画そのものは保存し、その代わりに写真を展示している。

神社境内周辺

大宮神社境内の本殿の後ろに小さな社が多くみられる。これらの社では、神道にかかわる、とりわけ土地、海上交通、学問の神を祀っている。また、天照大御神の孫である猿田彦大神を祀る石碑が数十ある。